

「国際研究開発/コファンド事業」
(終了時) 制度評価報告書(案) 概要

目 次

分科会委員名簿	1
評価概要(案)	2
評点結果	4

はじめに

本書は、NEDO技術委員・技術委員会等規程第32条に基づき研究評価委員会において設置された「国際研究開発/コファンド事業」(終了時評価)の研究評価委員会分科会(2023年10月25日)において策定した評価報告書(案)の概要であり、NEDO技術委員・技術委員会等規程第33条の規定に基づき、第75回研究評価委員会(2023年12月11日)にて、その評価結果について報告するものである。

2023年12月

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構
研究評価委員会「国際研究開発/コファンド事業」分科会
(終了時評価)

分科会長 角南 篤

「国際研究開発/コファンド事業」(終了時評価)

分科会委員名簿

	氏名	所属、役職
分科会長	すなみ あつし 角南 篤	政策研究大学院大学 学長特命補佐/客員教授
分科会長 代理	ごとう みか 後藤 美香	東京工業大学 環境・社会理工学院 教授
委員	かとう はるみ 加藤 晴洋	NECキャピタルソリューション株式会社 イノベーティブ・ベンチャーファンド パートナー
	さくらい まさたか 櫻井 政考	TEAMアライアンス株式会社 代表取締役社長
	さるわたり しゅんすけ 猿渡 俊介	大阪大学 大学院情報科学研究科 准教授

敬称略、五十音順

「国際研究開発/コファンド事業」(終了時評価)

評価概要(案)

1. 評価

1. 1 意義・アウトカム(社会実装)達成までの道筋

本事業は、日本企業と海外企業等の共同研究における支援を、技術開発成果の事業化を前提に実施し、それを通して日本企業の国際競争力を強化するというアウトカム達成の道筋が描かれている。日本企業と相手国企業の両者にとって技術的な相互補完やシナジー効果があることなどを前提として採択され、共同研究による連携の効果の最大化が図れるように設計されていた点は評価できる。また、アウトカム達成に向けて、助成期間終了後のフォローアップも効果的に実施されていた。

知財においては、各個別事業に応じた実用化・事業化の戦略に沿っているかの確認や、知財戦略の重要性に関する各事業者の理解を深めるための活動などを実施してきた。

一方、国際標準の獲得に向けた取り組みや市場のニーズの掘り起こしなど、ハンズオンで伴走していくためのリソースの確保に向けたさらなる工夫があってもよかったと考える。また、コファンドの難しさは、複数国にわたる成果の扱いを都度協議し、連携を確認することが必要なところであるが、本事業を通じて相手国との間で培った信用をさらに深め、事例ごとに柔軟な対策を講じるように、後継事業でも期待したい。

1. 2 目標及び達成状況

TRL というユニバーサルな指標を用いることで個別事業の事業化に向けた進捗度合いを可視化した試みは高く評価でき、事業化に向かってTRLが進んでいることに加え、すでに販売されて利益を出している個別事業もあることを併せて考えると、アウトカム目標に向かって順調に進んでいるといえる。また、コロナ禍での柔軟な運用見直しや中間評価での指摘事項を踏まえた制度の改善などを行い、アウトプット目標を大きく上回って達成できた点は高く評価できる。さらに必要な論文発表や特許出願もおおむね適切に行われていた。

後継事業では、今後の国際情勢や経済環境など見通しの難しい状況であることから、アウトカム目標を常に現実的なところに適宜設定し直し、注視していくことが望まれる。また、アウトカム目標への到達を推進していくためには、採択時の事業性の評価において、市場性の評価をより強化することが望まれ、さらに、アウトプット目標には採択件数だけでなく事業化件数も設定し、事業終了後もモニタリングしていくことが期待される。

注) TRL : Technology Readiness Levels (技術成熟度レベル)

1. 3 マネジメント

これまでの NEDO の経験の蓄積を活かし、コファンドという国際協働の難しさを乗り越える実施体制が構築できていたといえる。外部有識者による採択審査委員会、事業化や個別技術の評価する委員の選定等を通じて、適切な体制の下、審査・評価が実施されてきた。

日本企業と相手国企業間の連携に関する各種の協業関係の構築や実施上の問題に関して、相手国ファンディング機関との調整が適切に行われており、対象国拡大、EUREKA 活用など、毎年工夫しながら本事業の推進のためにきめ細やかな対応がなされていたと考える。また、中間評価結果を受けて改善を行った結果、スタートアップ企業も含む中小企業の応募の割合が増加しており、産業競争力の強化につながるように適切なマネジメントができたといえる。こうした本事業でのノウハウは後継事業の制度設計にも活かされており、発展的効果もあった。

今後、後継事業においては、新規市場の創出をさらに幅広く強化・展開していく上で、今回の事業ではカバーされていない地域の高い技術力をもった企業へのアプローチが期待される。また、PoC から事業化までの道筋については、コファンドならではの複雑かつ広範囲にわたる事業状況の進捗管理が求められることから、より適切で柔軟な取り組みが期待される場所である。

注) EUREKA : 欧州を中心とする各国の研究機関・イノベーション支援機関の国際的なネットワーク

PoC : Proof of Concept (概念実証)

2. 評点結果

評価項目・評価結果	各委員の評価					評点
1. 意義・アウトカム（社会実装）達成までの道筋						
(1)アウトカム達成までの道筋	B	A	A	A	A	2.8
(2)知的財産・標準化戦略	B	A	A	A	A	2.8
2. 目標及び達成状況						
(1)アウトカム目標及び達成見込み	B	A	B	A	A	2.6
(2)アウトプット目標及び達成状況	A	A	A	A	A	3.0
3. マネジメント						
(1)実施体制	A	A	A	A	A	3.0
(2)研究開発計画	B	A	B	A	A	2.6

《 判定基準 》

- A：評価基準に適合し、非常に優れている。
- B：評価基準に適合しているが、より望ましくするための改善点もある。
- C：評価基準に一部適合しておらず、改善が必要である。
- D：評価基準に適合しておらず、抜本的な改善が必要である。

(注) 評点は A=3、B=2、C=1、D=0 として事務局が数値に換算・平均して算出。